

東奈良遺跡出土の石釧とその破砕行為

清水 邦彦

1. はじめに

古墳に副葬される器物の一品目である腕輪形石製品は、その祖型や性格等を巡って、長い研究の歴史がある。その一方で、近年は発掘調査の増加に伴って増加しつつある集落遺跡からの出土事例も注目を集めている。主に古墳の副葬品として出土する遺物であることから集落遺跡と古墳との接点となりうること、古墳副葬品のなかでも生産地が明らかにされている数少ない品目の一つであり生産と流通の問題についてアプローチが比較的容易なことなどがその要因であろう。

本稿では集落遺跡である東奈良遺跡から出土した石釧の資料紹介をおこなうとともに、石釧の検討を通じて、古墳時代前期における東奈良遺跡の性格について、若干の言及を試みることにしたい。

2. 東奈良遺跡出土の石釧について

2.1. 石釧の出土状況

紹介する石釧は昭和48年度の調査(図1)で見つかったもので、包含層からの出土である(註1)。この包含層からの出土遺物は弥生時代中期後半および後期後半の土器が主体を占めるほか、ほぼ完全な形を保った東奈良1号銅鐸鑄型をはじめとした弥生時代の各種鑄造関連遺物も出土している。この包含層については、田代克己らが鑄造関連遺物を紹介するなかで、「表土下1.6m以下に40～60cmの厚さで堆積している黒色の遺物包含層」、「この遺物包含層中には弥生時代中期後半の土器が多く含まれているほか、弥生時代中期初のものも認められ、さらに後期のものや、古墳時代前期の土器も含まれており」と記述している(田代ほか1975)。同じ包含層から古墳時代前期の土器が出土していることを踏まえると、石釧は遺跡から遊離したものではないと理解できる。

また、同調査区では他に古墳の副葬品と思しき出土遺物はないこと、この時期の古墳は丘陵上に築造されていることから、古墳に伴うものではなく集落遺跡での出土事例と評価してよいだろう。

2.2. 石釧の概要

石釧(図2)は欠損しており、約1/4強の残存

率である。推定長径約8.3cm、高さ2.2cmで、内孔の推定上面径および下面径はともに約6.0cmである。石材は緑色凝灰岩である。外面上段の斜面は楕歯状に縦方向の溝を巡らす。その頂部に平坦面は作り出されていない。上段と下段の間には境界沈線がめぐり、下段は匙面となる。その匙面は2段となっている。以上の観察を踏まえると、この石釧は蒲原分類(蒲原1987)のⅢa類、北條分類(北條1994)の第2群石釧(B類)、森下分類(森下2005)の二凹式、上田の第2段階(上田2018)に該当する事例である。

また、本事例は大きく上下二つに破片化したものを接合したものであるが、現状は完全に復元・接合されており、破断面の観察は不可能である。しかし、接合箇所の表面上の観察からはわずかに欠損部はあるものの、ほぼ隙間なく接合したことがうかがえる。また、全体的に摩滅は認められない。そのため、石釧は出土した地点もしくはその



図1 東奈良遺跡調査地点 (S=1/15,000)
(茨木市史編さん委員会 2014)

近辺で割れた後、あまり時間を経ずに埋まったものと推測できる（註2）。

さらに、接合箇所の下端は大きく欠損しているのに対して、上端には欠損が認められない。この欠損は打撃による痕跡と考えられ、石釧は意図的に破砕されたと考えられる。このような目で見ると、残存する外側下端に小さな欠損がほかにもいくつか認められる一方、上端はこのような痕跡は認められない（図2写真）。そのため、基本的には下側からの打撃で破砕されたのであろう。ただし、上端に鋭利な道具で切り付けた痕跡が認められる。これも破砕しようとした痕跡とみるならば（註3）、いずれかの方向に限定できるものではない可能性もある。

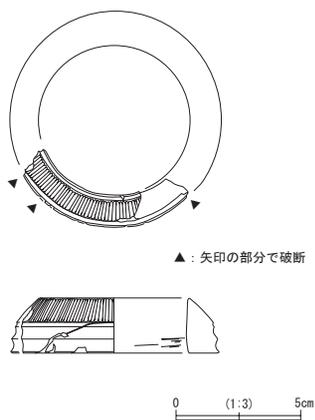
2.3. 石釧の時期について

包含層出土であることから、石釧の時期は遺物そのものの検討から考えるべきであろう。

蒲原宏行はⅢ類をⅡ類に直続するものと評価し、早い段階から出現するⅠ類やⅡ類より後出と評価する（蒲原1987）。古墳副葬品の組み合わせを検討した森下章司によると、二凹式は仿製三角縁神獣鏡のうちa3～a6式（森下1991）と組み合う（森下2005）。北山峰生は匙面を2段以上付すものは新相に属することを指摘する（北山2008）。上田直弥は二凹式の境界沈線を二凹式確立後に引き続き生産が続いていた一凹式の影響によって本義を失いつつ採用されたと評価する（上田2018）。このようにみるならば、東奈良遺跡例は古墳時代前期後半に位置づけることができる。

3. 東奈良遺跡出土石釧の性格

3.1. 集落遺跡出土腕輪形石製品の研究史



上記で紹介した東奈良遺跡出土の石釧はどのような性格のものであったのであろうか。まずは、先学による集落遺跡出土事例の研究を参照しよう。

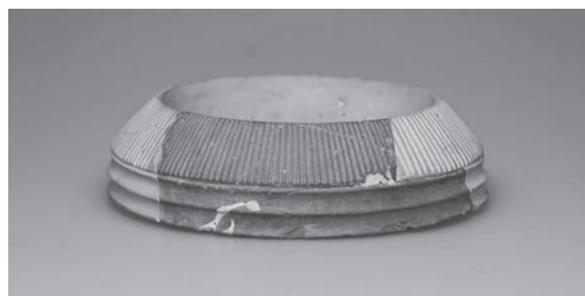
集落遺跡出土の腕輪形石製品に初めて注目したのは國下多美樹である。國下は京都府芝ヶ本遺跡例を検討し、葬送儀礼や副葬品としての使用や祭祀遺構の存在を想定した（國下1986）。

川村浩司は福岡平野における溝での祭祀を検討するなかで、石釧にも着目した。墳墓祭祀の一部と類似した行為が溝でおこなわれた可能性を指摘するとともに、集落と墳墓の比較検討の際の連結点としての重要性を説く（川村1988）。

北條芳隆は集落や溝からの出土事例は多くが石釧であること、破砕埋納の取り扱いが共通すること、そして古墳における破砕副葬および多量副葬と併せて、腕輪形石製品の歴史における終盤での派生現象と理解した（北條1994）。

高橋幸治は奈良県における腕輪形石製品が出土する集落遺跡の性格を検討し、首長居館が含まれること、交通の要衝にあたる場所に立地し物資流通に深く関与できるクラスの人物が腕輪形石製品を入手していたことを指摘した（高橋2003）。

辻田淳一郎は九州出土の腕輪形石製品を検討し、前期前葉～中葉という比較的早い段階から集



全体写真



上端拡大写真



下端拡大写真

図2 東奈良遺跡出土石釧

落や溝での儀礼的廃棄や穿孔・懸垂事例などがみられることから、集落出土の意味付けが厳密になされていたわけではなく、当初から比較的柔軟な使用形態が可能であったと考える（辻田 2009）。

ほかにも、滋賀県内においては有力者の居住する集落と玉作りをおこなう集落に集約されること（近藤 2004）、奈良県内の事例から首長層膝下での腕輪形石製品生産の可能性（大岡 2005）、製作地の検討から完成品のみが出土した遺跡を石製品の搬出にかかわる拠点集落と評価する見解（伊藤 2008）などがある。

3.2. 東奈良遺跡例の性格

上記の研究史から、集落遺跡出土の腕輪形石製品については、様々な性格や使用形態があったことがわかる。東奈良遺跡例は、遺物の観察から破砕行為を想定でき、かつ破砕後まもなく廃棄もしくは埋納した資料と評価できる。意図的な破砕行為は様々な候補のなかでも、祭祀行為に伴うものであった可能性が高いことを示している。

4. 東奈良遺跡出土石釧と前期古墳

東奈良遺跡で出土した石釧を祭祀行為に伴うものとしても、石釧自体は古墳に副葬される希少な器物でもある。東奈良遺跡において、このような器物が入手されていたことをどのように評価できるのだろうか。

このことを考えるうえで参考となるのが、東奈良遺跡の北方の丘陵上に位置する紫金山古墳、將軍山古墳、安威1号墳である。

紫金山古墳は全長約110mの前方後円墳で、竪穴式石室の内外から様々な副葬品が出土している。そのなかには、緑色凝灰岩製の鍬形石や車輪石も含まれている。鍬形石には幅のある型式・段階のものが含まれているが、組み合わせからは前半段階であること、また仿製三角縁神獸鏡のうちa1～a3式（森下 1991）との共伴から、前期中頃でも新しい段階に築造されたと考えられる。

安威1号墳は全長45mの前方後円墳で、1号粘土槨から車輪石、石釧、鍬形石（註4）がそれぞれ1点ずつ出土している（笹川・免山 1964）。車輪石、石釧ともに緑色凝灰岩製であり、車輪石は山部・谷部をもうけそれぞれ頂部と底部に沈線を入れた山谷式（森下 2005）、石釧も肋条系の山谷式で、側面下段の匙面が1面である。山谷式の車

輪石と石釧は幅がある型式であり、三角縁神獸鏡および仿製三角縁神獸鏡と組みあうことから（森下 2005）、東奈良遺跡例より古相もしくは同時期のものと考えられる。ただし、1号粘土槨は先に築かれた2号粘土槨を埋め戻して一定の時間が経過した後に築かれている。2号粘土槨については未調査であるもの、墳丘から出土した壺形埴輪は古墳時代前期中葉でも中頃、土器編年では布留2式の時間幅で理解でき、安威1号墳の築造時期をおさえることができる（廣瀬 2005）。1号粘土槨の構築はこの時期以降と考えられ、同様に石釧もこの時期以降に限定することができる。

將軍山古墳は全長107mの前方後円墳である。著しい盗掘を受けており、副葬品の全容は不明であるものの、出土遺物から紫金山古墳とほぼ同時期と考えられる。腕輪形石製品の出土はないものの、紫金山古墳、安威1号墳と同様、腕輪形石製品を入手していた可能性は十分にあるだろう。

東奈良遺跡出土石釧の入手については、①王権の上位層を介さない直接的な独自ルートでの入手、②多くの古墳副葬事例と同様に王権の上位層からの直接的入手、③王権の上位層から入手した地域の上記層を介した間接的入手、④独自入手した地域の上位層から間接的入手などが想定される。他にも想定しうる可能性を含めて、決定することは困難であるものの、上記事例のように、腕輪形石製品を副葬する古墳が近くに存在することを踏まえるならば、上記可能性のなかでも③、④の可能性が高いと考えることができる。

ところで、安威川流域の溝咋遺跡では東奈良遺跡と同様に外来系土器の出土が注目されており、かつ將軍山古墳や紫金山古墳などの竪穴式石室に使用される結晶片岩が出土している。そのため、東奈良遺跡と溝咋遺跡は古墳時代初頭における地域の物流拠点と評価されている（山田 2003）。さらに、菱田哲郎は紫金山古墳や將軍山古墳の被葬者がこうした下流域に位置する拠点的な集落を基盤に、遠隔地との交流を日常的に取り持っていたと考える（菱田 2012）。

上記検討を踏まえると、本稿で紹介した石釧もまた、集落遺跡と古墳の被葬者との接点を示す可能性が高い資料として注目できる。また、先述した高橋や菱田の理解（高橋 2003・菱田 2012）からは、東奈良遺跡は紫金山古墳や將軍山古墳の被

葬者が関わった物流拠点であり、だからこそ石釧を入手できたという理解を導くことも可能である。さらに推測を重ねるならば、そのようなクラスの人物が石釧の破碎行為を伴う祭祀を司っていた可能性も十分にありえるだろう。

5. おわりに

本稿では、東奈良遺跡から出土した石釧について紹介するとともに、祭祀による石釧の破碎行為を想定した。また、東奈良遺跡と前期古墳の関係についても言及した。東奈良遺跡は弥生時代の大規模集落であり、銅鐸などの青銅器の生産拠点として著名である。そのため、弥生時代のイメージが非常に強い遺跡であるが、本稿で紹介した石釧を踏まえれば、古墳時代においても重要な遺跡であったと考えられる。一方で、集落構造などその具体的な様相ははっきりとしない。古墳時代における東奈良遺跡の様相把握は今後の課題である。

本稿の執筆にあたり、奥井哲秀氏、辻川哲朗氏、廣瀬時習氏のご教授やご協力を得た。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 奥井哲秀氏のご教授による。
- 2) 北條芳隆も東奈良遺跡例を含めた、長野県石川条理遺跡例、愛媛県福音寺遺跡竹ノ下地区出土例、奈良県纏向遺跡例、京都府芝ヶ本遺跡例の集落出土事例について、「古墳からの2次的流入であれば当然生じるであろうと思われる破断面の顕著な摩耗や沈線の摩滅、あるいは縁辺部の細かな剥離などを認めなかった」と評価する(北條1994)。
- 3) 発掘調査時などによる破損である可能性もある。
- 4) 鍬形石は採集品で、所在不明である。

参考文献(五十音順)

- 伊藤雅文 2008「古墳時代前期における石製品製作モデル(予察)」『玉文化』第6号 pp.21-43
- 茨木市史編さん委員会 2014『新修茨木市史』第7巻
- 上田直弥 2018「石釧型式の変遷と生産の画期」『待兼山考古学論集Ⅲ - 大阪大学考古学研究室30周年記念論集 - 』大阪大学考古学研究室 pp.385-398
- 蒲原宏行 1987「石釧研究序説」『比較考古学詩論』雄山閣 pp.103-169

- 大岡由記子 2005「古墳時代における大和の玉作り」『立命館大学考古学論集』IV 立命館大学考古学論集刊行会 pp.103-114
- 川村浩司 1988「福岡平野における溝での祭祀」『日本民族・文化の生成』1 永井昌文教授退官記念論文集 pp.419-436
- 北山峰生 2008「メスリ山古墳出土石製品の検討」『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学考古学報告第3冊 大阪市立大学日本史研究室 pp.111-128
- 北山峰生 2010「古墳時代前期における石製品の生産動向」『古代学研究』第187号 古代学研究会 pp.20-37
- 國下多美樹 1986「芝ヶ本遺跡出土の碧玉製石釧について」『京都考古』第43号 pp.9-11
- 近藤 広 2004「近江の石製宝器類と玉づくり集団」『地域と古文化』 pp.75-86
- 笹川隆平・免山篤 1964「安威古墳群」『茨木市の文化財』第3集 茨木市教育委員会・茨木市文化財研究調査会 pp.17-20
- 高橋幸治 2003「集落出土の腕輪形石製品 - 大和を中心に - 」『新世紀の考古学 - 大塚初重先生喜寿記念論文集』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会 pp.369-384
- 高橋幸治 2010「腕輪形石製品の生産と流通」『古代学研究』第187号 古代学研究会 pp.38-45
- 田代克己・奥井哲秀・藤沢真依 1975「東奈良遺跡出土の銅鐸鎔范について」『考古学雑誌』第61号1号 日本考古学会 pp.1-10
- 辻川淳一郎 2009「九州出土の腕輪形石製品」『奴国の南 - 九大筑紫地区の埋蔵文化財 - 』九州大学総合博物館 pp.84-99
- 菱田哲郎 2012「古墳時代の茨木市域」『新修茨木市史』第1巻 茨木市 pp.350-424
- 廣瀬覚 2005「安威古墳群の壺形埴輪」『将軍山古墳群Ⅰ』新修茨木市史資料集8 pp.59-63
- 北條芳隆 1994「石川条里遺跡と腕輪形石製品」『中部高地の考古学』IV 長野考古学会 pp.235-254
- 森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号 史学研究会 pp.1-43
- 森下章司 2005「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第89巻第1号 日本考古学会 pp.1-31
- 山田隆一 2003「淀川流域の古墳時代初頭集落について」『考古学論叢：関西大学考古学研究室開設五拾周年記念』上巻 pp.229-259